

---

# 機動戦士ガンダム S E E D 介入された物語

ヴァン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED 介入された物語

### 【Nコード】

N9108N

### 【作者名】

ヴァン

### 【あらすじ】

ガンダムSEEDの世界に行きたいと願っていたとある高校生、そんな願いを叶えてくれた神様を名乗る女性が彼に機体と能力を与えSEEDの世界へ連れて行った。  
なんか、他のアニメの武器やキャラが出たりしますが、基本的にSEEDです。

## プロローグ

俺は………思った。

機動戦士ガンダムSEEDへ………行きたいと！

「そんな純粋な願いを叶えてくれ！」

そう思ったら俺の目の前は……真っ白になった。

「君の願いを叶えてあげる」

目をあけたらそこに現れた一人の女性がいた・・・俺の願いを叶えてくれるだ・・・マジか！

「ホントに叶えてくれるのか？」

「うん・・・私は神様だよ叶えてあげられるよ！」

マジで・・・こんな小説見たいな・・・展開があるとは・・・ホントにあるとは思わなかったぜ。

「じゃあ俺をSEEEDの世界に早く連れてってくれ！」

「うん、じゃあ行く前に貴方の好きな機体と能力を二つ叶えてあげるよ」

好きな機体と・・・能力か・・・SEEEDの機体で行くと面倒だし・・・コーディネーターだとウザイ視線が有りそうだから・・・うっゝん・・・よし！

「機体はOGのアルト・アイゼンで全長は18メートルに下げて、能力はニュータイプとオリジナルでヨロシク！」

どうしてスパロボの機体を選んだかって・・・だってロボット好きの俺が一番のお気に入りだから、それに加えニュータイプ能力もあれば、SEEDの世界じゃ無敵になれるから！・・・だって一応別世界にいくなら最強になりたいじゃん

「わかった、アルト・アイゼンを選んだなら、ヴァイス・リッターとエクセレン・ブラウニングを着けないとね」

なぜ？

「実戦での運用には基本としてヴァイスリッターとの連携が不可欠となってくるでしょ」

「そうでした・・・」

すっかり忘れてたな・・・

「よろしくね キョウスケ。そーいえばあいつと同じ名前だね」

・・・そう言えば俺・・・名前いったけ？

「面倒だから君の名前は教えたの」

神様が言ってくれました・・・成る程・・・面倒だからか、ちょっと悲しい・・・あ、自己紹介が遅れたけど・・・俺は南武 恭介といます・・・OGのキョウスケと同じ名前です、読みが・・・遅い自己紹介ですいません！！

「誰に言ってるのよ？」

誰だっていいじゃん・・・細かい事は気にしない。

・・・と、それよりも。

「それより早く連れてってくれ」

「はいはいわかりました」

神様はそう言った、すると突然俺の周りの光出した。

「じゃあね、頑張ってね」

こうして、俺はエクセレンと一緒に・・・能力と機体をもらい、旅立った。

## S - 1 行動開始？（前書き）

遅くなつたあゝ  
遅れてすいません。

## S - 1 行動開始？

「ジャンクばかりだな・・・」

本日、何度めかのグチをこぼしながら、周囲のデブリからジャンク品で使えそうなパーツを探す。

こちらに着てから、数年たった。

たまに、アルトで戦争に介入しているが・・・。

「これでもなきゃ・・・あれでもないな・・・。ん？あ、あったあった」

戦艦のパーツを探して見つけては拾っている。

そんなあれこれ、1時間。

「さすがに、アルトだけではこれ以上、もてないな」

そう呟き、輸送艦に戻り始める。

そして・・・時々思う。

今していることが

ただ真実から

・・・逃げているだけかもしれないということを



俺の輸送機は十分な量のパーツが集まった。

「しっかし、なぐんかここだと墓荒らしをしてるみてーだな。・・・  
・まっ俺には関係の無い話だな。」

そう、ここはユニウスセブンの残骸空域多くの人たちが死んだ場所でもある。

「なんまんだゝ、なんまんだゝ」

とりあえず供養と謝罪のつもりで経を唱えていた、その時一筋のビームがこちらに向かって飛んできた。

「うおわゝ！な！なんだー！いまのは！ー！」

俺はぎりのちよんのところでビームをかわした。センサーにモバイルスーツの反応ともう一つ作業艇があった。

「なんなんだよ！・・・よし」

俺はモバイルスーツの反応のほうに向かっていった。

「みつけ！」

さっきビームぶっ放しなしたかもしれないモバイルスーツの姿を捉えた。

「・・・あれは一体。新型か？外見はザフト製ではなさそうだな。それに撃ってきたのはビーム兵器・・・ザフトはビーム兵器なんてもってねえし・・・まさか連合製か？」

頭部にアンテナが4本ついて目が2つあって白いカラーのモビルスーツだった。まあ、正体は知ってんだけど俺は通信を送ってみた。

「待て！こちらに戦闘の意志は無い！」

しかし、相手はこちらの通信を聞きゃいねーのか攻撃続けてきた。

「問答無用ってことかい。」

俺は、はたから見たら不恰好すぎる体勢で避け続けたが、シヨルダーにビームが掠った。その時俺の中の何かが切れた。

「てめえ、戦闘の意志はねえって言ってるおおおお！！！」

俺は相手に急接近した。しかし、相手はビームで乱射してくるが俺は自慢の動体視力で避けつつ相手の懐にしがみ付いた。この距離ならライフルのような武器は使えない。俺は直接回線で通信入れることにした。切れていても無用な戦いは避けたいからだ。

「おい！パイロット！戦闘の意思はないって言ってる！」

相手のパイロットの声が入ってきた。

「あなたはさっきのジンの仲間だ。生かして帰せばまた狙われる。」  
「俺は只のジャンク屋だ！それにこれがジンに見えるわけない！」  
「信用できない！さっきのジンはこちらにライフルを構えた！それにだって内臓武器があるかもしれない！」

確かにアルトにはあるなって、そうじゃない！

相手はビームサーベルに切り替え攻撃してきた。俺はまたもや紙一重で回避ながら再度説得しよう、と思ったが。もう我慢の限界だった。

「てめえいい加減にしろよ。そんなにやりたきや相手になってやる！！」

俺は相手の懷に飛び込みヘッドにパンチを喰らわせた。しかし、ヘッドは無傷であった。しかも頭部からバルカンを放ってきた。俺は咄嗟に頭部を持ち上げ発射角をずらした。

「危ねえな！！それに効かないのかよ。だったらオリジナルの戦法みせてやるっじゃねえの！」

俺はコックピットにラッシュをし始めた。装甲が傷つかないなら中のパイロットを衝撃でグロッキー状態にする作戦に切り替えた。

「喰らえ喰らえ喰らえ！」

ある程度パンチ（ステーク付き）を決めたらコックピットを踏み付け階段でも上るように駆け上がった。流石の敵さんも多少よれて大人しくなった。そしてとどめにドロップキックをかまそうとした次の瞬間センサーが響いた。すると目の前に救命ポットを発見した。今の俺には面倒見切れないので目の前のパイロットに交渉してみた。

「おい！そのパイロットの兄ちゃん！」

「ぐっ、なっ何ですか！あなたは！！何てめちゃくちゃな戦い方を。」

「んなこと今はどうでもいい！近くに救命ポットがある。俺は面倒見れねーからお前拾ってけ！大方近くに母艦があるだろ！」

「何なんですかあなたは！信じられない！」

「だったら俺は投降する！人命が優先だ！そのライフル構えてろ！信じられなくなったら何時でもぶっ放せ！その代わり救命ポットの奴は必ず助ける！」

「わかりました。救命ポットは保護しました。あなたはこちらの誘導に従ってください。妙な行動に出たら容赦なく打ちます。」

「・・・わかった。そうピリピリするな。」

とりあえず俺は相手の誘導に従った。そして白く大きな軍艦を目の当たりにした。

「でつつけええー！！！！！！」

俺は思わず感激してしまった。さっきのパイロットは、はあ、とため息を漏らしていた。中の格納庫でとりあえずいやあな歓迎を受けた。

「ちょっと、そんな物騒なもの下げてよ。」

「ふざけるな！モビルスーツに乗ってたんだぞ！ザフトのコーディネイターだろ貴様！」

目の前の軍服着たお兄さん方そう言いながら銃を構えていた。

「人を見かけで判断するなって。第一俺はジャンク屋だしコーディネートじゃあねって。信用できねえなら俺の輸送機この辺に放置しっぱなしだから調べてくれよ。ジャンクパーツばかり入ってるから。」

「とりあえず、あなたの名前を覚えてくれないかしら」  
藪から棒に目の前の軍服着た姉ちゃんがそう言ってきた。

「俺はキヨウスケ・ナンブだ。」

「ナンブ・・・？どこかで聞いたことがあるような。」

「ところであなた一体どちらさん？」

「私はマリユー・ラミアス、この艦の艦長よ。」

「ほぉ」

「おどろかないの？」

「別にどうってことないよ。ところでさっきのポットは？それにさっきのパイロットの兄ちゃんは？」

「ああ、それなら「艦長ーーーー」

艦長さんの言葉を遮って男が報告にやってきたもようだ。

「どうしたの？」

「確かに輸送機を発見しました。この男の言ったとおりジャンクパーツと整備デッキがあるだけでした。」

「ほら言ったとおりだろ。さっさと解放してくれ。」

「それがさっきの戦闘で輸送機は被弾して使えなくなっていました。」

「げっ!!」

俺は物凄くショックだった。

「ああ^^; だったら途中までこの艦に乗っていけばいいわ。ねっ。」

「ははは・・・そうさせていただきやす。」

この時半分投げやりだった俺は突如思いついたことが会った。

「そっぴやあのパイロットの兄ちゃんに会ってみたい」

「えっ」

「まあ、これから暫く旅を共にするんだからな。どんな奴か拝見してみたい。」

「えっ ええ、多分まだ格納庫に居ると思うからあってくるといいわ。」

「ういゝっす、んじゃちょっくら行ってまいりやす。」

俺はさっきの機体の方向へ進んでいった。

「バジール少尉、彼のことちょっと調べてみてくれない？」

「はい！了解しました。」

「ええつと、ねえねえねえ、あのモビルスーツに乗ってた奴って誰だか分かる？」

俺は近くを通りかかった茶髪の少年に聞いた。少年は驚いたように俺に言った。

「えっ、僕ですけど。」

「ほんとかよー！お前すっげなあー！！！」

純粹に感心した。俺とそんなに歳も変わらない奴がこんなもの操縦していたことに驚いていた。そして少年はバツの悪そうな顔をしながら俺に言った。

「っだつて、僕はコーディネイターですから。」

「コーディネイターでもすげーもんはすげーよ。」

少年はキョトンとしていた。おそらくコーディネイターであることを良く言われなかったのであるう。

「ところであなたは？」

「俺か？俺はさっきの赤いのに乗ってた男さ」

「えっ！じゃああなたもコーディネイター？」

「いや、俺はナチュラルだけど。あつ俺暫くこの艦に乗っけてもらうことになったから」

「ええっ！」

「とりあえず自己紹介だ。俺はキョウスケ・ナンブよろしく。」

「キラ・ヤマトです。」

「そっか。じゃとりあえず歳も近いみたいだし敬語はやめにしようぜ。」

「えっ、うん！」



・・・これが俺と彼とそしてこの白い戦艦との出会いだった。

…そして俺は今まで目を背けてきた戦争という真実に、・・・深く関わっていくのだった。

・・・あ、エクセレンのこと忘れてた・・・ま、いつか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9108n/>

---

機動戦士ガンダムSEED 介入された物語

2010年11月29日20時02分発行